

夏目漱石

道楽と職業



# 道樂と職業



ただいまは牧君の満洲問題——満洲の過去と満洲の未来というような問題について、たいへん条理の明あきかな、  
そうして秩序のよい演説がありました。そこで牧君の披露ひろうによると、そのあとへ出る私は一段と面白おもしろい話をすると、  
いうようになって、なかなか牧君のよううまに旨くできません。ことに秩序がなからうと思う。ただいま  
本社の人が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概こうがいを二十行ばかりにつづめて書けという注文でしたが、それは

書けないと言って断ったくらいです。それじゃア饒舌しやべらないかというのと、現にこうやって饒舌りつつある。饒舌することはあるのですが、秩序とか何とかいうことが、ハツキリ句くぎ切りが付ついて頭にたたみ込んでありませぬから、あるいは前後したり、混雑したり、いろいろお聴きにくいところがあるだろうと思います。ことにあなたがたの頭もだいぶ労れておいででしょうから、まずなるべく短みじかく申そうと思う。

私の申すのは少しもむずかしいことではありません。満洲とか安南とかいう対外問題とは違ってごくやさしい

「道楽と職業」というしごく簡単なみだしです。内容もしたがって簡単なものがあります。まあそれをちよつとわずかばかりお話をしようと思う。

元来こんな所へ来て講演をしようなどとはまったく思おもよらぬことでありましたが、「ぜひ出て来い」ところというわけで、それではなにか問題を考えなければならぬからその問題を考える時間を与えてくれと言いましたら、社のほうでは宜よろしいといつて相応の日子を与えてくれました。ですから考えてこないということもいえ、出でこないということもむろんいえ、それでとうとう

ここへ現われることになりました。けれども明石あかしという所は、海水浴をやる土地とは知っていましたが、演説をやる所とは、昨夜到着するまでも知りませんでした。どうしてああいう所で講演会を開くつもりか、ちよつとその意を得るに苦しんだくらいであります。ところが来てみると非常に大きな建物があつて、あそこで講演をやるのだと人から教えられてはじめてもつともだと思ひました。なるほどあれほどの建物を造ればその中で講演をする人をどこからか呼ばなければいわゆる宝の持腐れもちぐさになるばかりでありましょう。したがって西日がカンカン照



って暑くはあるが、せつかくの建物に対しても、あなたがたは来てみる必要があり、また我々は講演をする義務があるとしてもいおうか、まアあるものとしてこの壇上に立ったわけである。

そこで「道楽と職業」という題。道楽といいますが、悪い意味にとるとお酒を飲んだり、またはなにか花柳社会へ入はいったりする、俗に道楽息子どうらくむすこといいますが、ああいう息子のする仕業しわざ、それを形容して道楽という。けれども私のここでいう道楽は、そんな狭い意味で使うのではない、もう少し広く応用の利きく道楽である。善よい意味、

善い意味の道楽という字が使えるか使えないか、それは知りませぬが、だんだん話して行くうちに分るわかだろうと思う。もし使えなかつたら悪い意味にすればそれで宣いのであります。

道楽と職業、一方に道楽という字を置いて、一方に職業という字を置いたのは、ちようど東と西というようなもの、南北あるいは水火、つまり道楽と職業が相あいたたか闘うところを話そうと、こういうわけである。すなわち道楽と職業というものは、どういよううに關係して、どういよううに食い違っているかということをまず話し

て——もつともその道楽も職業も、すでに御承知のあなたに、たがたにそういうことをいう必要もなし、私もしいてやりたくはないが、しかし前<sup>ぜん</sup>申したような訳でわざわざ出てきたものだから、そこはあなたがたにすでにお分りになつてゐる程度以上に、一步でももう少し明かに分らせることが、私の力でできればそれで私の役目は済<sup>す</sup>んだものとならない高<sup>たか</sup>を括<sup>くく</sup>つてゐるのであります。

それで我々は一口によく職業といますが、私このあいだも人に話したのですが、日本に今職業が何種類あつて、それが昔に比べてどのくらいの数に殖<sup>ふ</sup>えているかと

いうことを知っている人は、おそろくないだろうと思う。現今の世の中では職業の数は煩雑になっている。私はかつて大学に職業学という講座を設けてはどうかということを考えたことがある。建議しやしませぬが、ただ考えたことがあるのです。なぜだというと、多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。もちろん天下の秀才が出るものと仮定しまして、そうしてその秀才が出てからなにをしているかというと、なににか糊口ここうの口がないかなにか生活の手蔓てづるはないかと朝から晩まで捜して歩いている。天下の秀才をなににかないかなにかと血眼ちまなこ

にさせて遊ばせておくのは不経済の話で、一日遊ばせておけば一日の損である。二日遊ばせておけば二日の損である。ことに昨今のように米価の高い時はなおさらの損である。一日も早く職業を与えれば、父兄も安心するし当人も安心する。国家社会もそれだけ利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけれども、その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものがあまりないようです。あまりどころかなかなかない。今いうとおり天下に職業の種類が何百種何千種あるか分ら

ないくらい分布配列されているにかかわらず、どこへでも融通が利くべきはずの秀才が懸命に馳け回っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなかない。三箇月も四箇月も遊んでいる人があるのでこれは気の毒だと思うと、あに計らんやすでに一年も二年もボンヤリして下宿に入って為すこともなく暮しているものがある。現に私の知っている者のうちで、一年以上も下宿に立たて籠こもって、いまだに下宿料を一文も払わないで茫然ぼうぜんとしている男がある。もつとも下宿のほうでも信用しているから貸しておくし、当人もどうかなるだろうと思っ

て安心はしているらしいが国家の経済からいうとずいぶん馬鹿気ばかげた話であります。私も多少知っている間柄あいだがらだから気の毒に思つて、職業はないか職業はないかくらい人に尋ねてみるが、どこにもそういう口が転ころがっていないので残念ながらまだそのままになっています。けれども今いうとおり職業の種類が何百とおりもあるのだから、理窟からいえばどこかへ打付ぶかつてしかるべきはずだと思つたのです。ちよつと嫁を貰もらうようなもので自分の嫁はどこかにあるにきまつてるし、また向むこうでも捜してゐるのは明らかかな話だが、つい旨くゆかないといつまで

も結婚が後おくれてしまう。それと同じでいくら秀才でも職業に打ぶ付つからなければしようがないのでしよう。だから大学に職業学という講座があつて、職業は学理的にどういふように発展するものである。またどういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出てくるものである。と一々明細に説明してやって、たとえば東京市の地図が牛込うしごめ区とか小石川こいしかわ区とか何区とかハッキリ分つてるように、職業の分化発展の意味も区域も盛衰も一目の下りようぜんに瞭然会得しかけできるといふような仕掛にして、そうして自分の好きなところへ飛び込ましたらまことに便利じゃないか



と思う。まあこれは空想です。実際やってみないから分らぬが、おそらくできますまい。できたらよろし宣よろしかろうと思うだけです。非常に経済なことにはなるでしょう。

こんな考かんがえを起すほどに私は今の日本に職業が非常にたくさんあるし、またその職業が混乱錯雑しているように思うのです。現にこのあいだも往来を通ったら妙な商売がありました。それは家とか土蔵とかを引きずってゆくとという商売なんだから私は驚いたのであります。この公会堂をこのまま他の場所へ持ってゆくとという商売です。いくら東京に市区改正が激はげしく行われたって、そう

毎年建てたばかりの家の位置を動かさなければならぬと  
いうように変化していやアしない。現に私の家などは建  
った時から今日まで市区改正に掛らずにいる。ほよど  
辺鄙な所にあるのだからでしょう。けれどもたとえ繁華  
な所にいたって、そう始終家を引ッ張ッてツてもらわな  
ければならぬという人はない。しかるにそれを専門に商  
売にしている者があるから、東京は広いと思つたのです。  
馬琴ばきんの小説には耳みみの垢あか取り長官ちようかんとかいう人がいますが、  
他ひとの耳垢みみを取ることを職業にでもしていたのでしよう  
か。西洋には爪つめを綺麗きれいに掃除そうじしたり恰好かっこうをよくするとい

う商売があります。近ごろ日本でも美顔術といって顔の垢を吸出してみたり、クリームを塗抹とまつしてみたりいろいろの化粧をしてくれる専門家が出てきましたが、ああいう商売はおそらく昔はないのでしよう。今日のよ  
うに職業が芋いもの蔓見つるたようにそれからそれへと延びてい  
っている種類が殖ふえなければ、美顔術などという細  
かな商売は存在ができなからうと思う。もつとも昔はか  
えって今にない商売がありました。私の幼少の時は「柳  
の虫や赤あかがえる蛙うりごえ」などと言って売りに来た。何にしたもの  
か今はただ売声うりごえだけ覚えています。それから「いたずら

ものはいないかな」と言つて、旗を担いで往来を歩いて来たのもありました。子供の時分ですからその声を聞くと、ホラ来たと言つて逃げたものである。よくよく聞いてみると鼠取りの薬を売りに来たのだそうです。鼠のいたずらもので人間のいたずらものではないといふのでやつと安心したくらいのものである。そんな妙な商売は近ごろとんとなくなりましたが、締括しめくくった総体の高からいえば、どうも今日のほうが職業というものはよほど多いだろうと思う。単に職業に変化があるばかりでなく、細かくなつてゐる。現に唐物屋とうぶつやというものはこのあいだま

でなんでも売っていた。襟えりとか襟飾りえりかざとかあるいはズボン下、靴足袋くつたび、傘かさ、靴くつ、たいていなものがありました。身体からだへ付けるいっさいの舶来品を売っていたといつても差さしつかえ支ない。ところが近ごろになるとそれが変ってシャツ屋はシャツ屋の専門ができる、傘屋は傘屋、靴屋は靴屋とちゃんと分れてしまいました。靴足袋屋……これはまだ専門はできないようだが、今にできるだろうと思います。現に日本の足袋屋は専門になっています。十文のを呉くれと言えは十文のを呉れる、十一文のを呉れると言えは十一文のを呉れる。私が演説を頼まれて即席ひきぎょうに引受

けないのは、足袋屋みたいにちよつと出来合できあいがなければ、どうか十文の講演をやってくれ、あそこは十一文こうだか甲高の講演でなければ困るなどと注文される。そのくらいに私が演説の専門家になつていれば訳はありませんが私のお手際てぎわはそれほど専門的に発達していません。素人しろうとが義理に東京からわざわざ明石辺までやってくるというくらいの話でありますから、なかなかそう旨くはいきませぬ。足袋屋はさておいて食物屋たべものやのほうでもチャンとした専門家があります。たとえば牛肉も鳥の肉も食わせるところがあるかと思うと、牛肉ばかりの家うちがあるし、ま

た鳥の肉でなければ食わせないという家もある。あるいはそれがいちだん細かくなって家鴨あいがもよりほかに食わせない店もある。しまいには鳥の爪だけ食わせるところとか牛の肝臓だけ料理する家ができるかもしれない。分れてゆけばどこまでゆくか分かりません。こんなに劇はげしい世間だからしまいにはたいへんなことになるだろうと思う。とにかく職業は開化が進むにつれて非常に多くなっていることが驚くばかり目につくようです。ところがこれは当り前あたまえのことで学問の研究のうえから世の中の変化とでもいいましようか、漠然ぼくぜんたる社会の傾向とでもいいまし

ようか、必然の勢いきおい そういうように割れて細かになつてくるのであります。これはなにも私の発明した事実でもなんでもない、昔から人のいつていることであります。昔の職業というものはおおまかで、なんでも含んでいる。ちようど田舎いなかの呉服屋みたいに、反物たんものを売っているかと思つと傘を売つておつたり油も売るといふ、何屋だか分らぬ万事一切を売る家というようなものであつたのが、だんだん専門的に傾いていろいろに分れる末はほとんど想像が付かないところまで細かに延びてゆくのが一般のありさま有様といつて差支ないでしょう。



ところでこの事実をずっと想像に訴えて遠い過去に  
溯<sup>さかのぼ</sup>つたらどうなるでしょう。あるいは想像でも溯れな  
いかもしれないけれども、この事実のうちに含まれてい  
る論理の力で後<sup>うし</sup>ろの方へ逆行したらどんなものでしよ  
う。今いうとおり昔は商売というものの数が少なかつた。  
職業の数が少なくて、世間の人もその僅<sup>わず</sup>かな商売をも  
って満足しておったというわけなのだから、あるいは傘  
を買いに行っても傘がない、衣<sup>きもの</sup>物<sup>もの</sup>を買いに行っても衣<sup>きもの</sup>物<sup>もの</sup>  
がないという時代がないとも限らない。私はかつて熊本<sup>くまもと</sup>  
におりましたが、ある時灰吹<sup>はいふき</sup>を買いに行つたことがある。

ところが灰吹はないと言う。熊本中どこを尋ねてもないかといったらないだろうという。じゃ熊本では煙草たばこを喫のまないか痰たんを吐かないかというところ現に煙草を喫んでい。それでは灰吹はどうするんだと聞くと、裏の藪やぶへ行って竹を伐きってきて拵しらえるんだと教えてくれました。裏の藪から伐ってきて、青竹の灰吹で間まに合あわしておけば宣いと思っっている所では灰吹は売れないわけである。したがって売っているはずがないのである。そういう風に自分で人の厄介やっかいにならずに裏の藪へ行行って竹を伐って灰吹を造るごとく、人のお世話にならないで自分の身の囲まわ

りをなるべく多く足す、また足さなければならぬ時代があつたものでしよう。さてその事実を極端まで辿つてゆくと、一切万事自分の生活に關したことは衣食住ともいかなる方面にせよ人のお蔭かげを被こごむらないで、自分だけで用を弁じておつた時期があり得うるといふ推測になる。人間がたった一人ひとりで世の中に存在しているといふことは、ほとんど想像もできないかもしれないし、またそこまで論理を頼りに推詰おしつめて考える必要もない話ですが、そこまでゆかないとちよつと講話にならないから、まあそうしておくのです。すなわち誰のお世話にもならない

で人間が存在していたという時代を思い浮べてみる。たとえば私がこの着物を自分で織って、この襟を自分で拵こしらえて、すべて自分だけで用を弁じて、なにも人のお世話にならないという時期があったとする。またあったとしても宣いでしよう。そういう時期がいつかあったらどうするということではないが、まああると仮定してごらんなさい。そうしたらそういう時期こそほんとうの独立独行ことばという言葉の適当に使える時期じゃないでしょうか。人から月給を貰もらう心配もなければ朝起きて人にお早うと言わなければ機嫌きげんが悪いという苦労もない。生活上寸毫すんごう

も人の厄介にならずに暮してゆくのだから平気なものである。人にちつとも迷惑を掛けないし、また人にいささかの恩義も受けなくて済むのだから、これほど都合のいいことはない。そういう人がほんとうの意味で独立した人間と謂いわなければならぬでしょう。実際我々は時勢の必要上そうはゆかないようなものの腹の中では人の世話にならないでどこまでも一本立で遣やつてゆきたいと思っているのだからつまりはこんな太古の人を一面には理想として生きているのである。けれども事実已やむを得ない、仕方しかたがないからまず衣物きものを着る時には呉服屋の厄介

になり、お菜さいを拵さいえる時には豆腐屋の厄介になる。米も自分で搗つくよりも人の搗いたのを買うということになる。その代りに自分は自分で米を搗き自分で着物を織ると同程度のある専門的のことを人に向むかってしつつあるというわけになる。私はいまだかつて衣物を織ったこともなければ、靴足袋を縫ったこともないけれども、みずから縫わぬ靴足袋、あるいはみずから織らぬ衣物の代りに、新聞へ下くだらぬことを書くとか、あるいはこういふ所へ出てきてお話をするとかして埋うめ合あせあせせを付けているのです。私ばかりじゃない、誰でもそうです。するとこの一歩専

門的になるといふのはほかの意味でもなんでもない、すなわち自分の力に余りあるところ、すなわち人よりも自分が一段と抽<sup>ぬき</sup>んでている点に向つて人よりも仕事を一倍して、その一倍の報酬に自分に不足したところを人から自分に仕向<sup>しむ</sup>けてもらつて相互の平均を保ちつつ生活を持つ続するといふことに帰着するわけであります。それをごくむずかしい形式に現わすといふと、自分のためにすることはずなわち人のためにすることだといふ哲理をほのめかしたような文句になる。これでもまだちよつと分らないなら、それをもつと数学的にいい現わしますと、己<sup>おのれ</sup>

のためにする仕事の分量は人のためにする仕事の分量と同じであるという方程式が立つのであります。人のためにする分量すなわち己のためにする分量であるから、人のためにする分量が少なければ少ないほど自分のためにはならない結果を生ずるのは自然の理であります。これに反して人のためになる仕事をよけいすればするほど、それだけ己のためになるのもまた明かなめいりょう因縁であります。この関係を最も簡単にかつ明瞭めいりょうに現わしているのは金ですな。つまり私が月給を拾五円なら拾五円取ると、拾五円がた人のために尽しているという訳でとりも直さ



ずその拾五円が私の人に対して為し得る仕事の分量を示す符丁ふちようになっっています。拾五円がた人に対する労力を費す、そうして拾五円現金で入れはいばすなわちその拾五円は己のためになる拾五円にすぎない。同じ訳で人のために千円の働きができれば、己のためにも千円使うことができるので、諸君もなるべく精出せいだして人のためにお働きになればなるほど、自分にもますます贅沢ぜいたくのできる余裕をお作りになると変りはないから、なるべく人のために働く分別をなさるが宜しかろうと思う。

もつとも自分のためになるといつてもためになり方はいろいろある。第一その中から税などを払わなければならぬ。税を出して人に月給をやったり、巡査を雇っておいたり、あるいは国務大臣を馬車に乗せてやったりする。もつとも一人じやアこれだけのことはできませぬ、我々おおぜいで金を出してやるのですが、畢竟ひっきようずるにあの税などもやはり自分のために出すのです。国務大臣が馬車や自動車に乗って怪けしからんといったってそれは野暮やぼのいうことです。我々が税を出して乗らしておいてやるので国務大臣のためじやない、つまり己のためだと

思えば間違まちがはない。だから時々自動車ぐらい借りに行つても宣のたまかろうと思う。税はそのくらいにしてこのほか己のためにするものは衣食住と他の贅ぜいたく費ひになります。それを合算すると、つまり銀行の帳簿のように収入と支出と平均します。すなわち人のためにする仕事の分量はとりも直さず己のためにする仕事の分量という方程式がちやんと数字の上に現われてまいります。もつとも吝けちで蓄ためている奴やつがあるかもしれないが、これは例外である。例外であるが蓄めていればそれだけの労力というものを後あとへ繰くり越こすのだから、やはり同じ理窟になります。よく

彼奴あいつは遊んでいて憎らしいとかまたはごろごろしていて  
 羨うらやましいとか金持の評判をするようですが、そもそも  
 人間は遊んでいて食えるわけのものではない。遊んでい  
 るようにみえるのはふところ懐にある金が働いてくれているか  
 らのことで、その金というものは人のためにすることな  
 しにただ遊んでいてできたものではない。親父おやじが額へそくりに汗  
 を出した記念だとかあるいは婆さんの臍へそくりだとかなかには  
 因縁付きの悪い金もありましたようけれども、とにかく  
 なんらか人のためにした符徴、人のためにしてやったそ  
 の報酬というものが、つまり自分の金になって、そうし

て自分はそのお蔭かげでもって懐ふところ手てをして遊んでいられる  
 というわけでしょう。職業の性質というものはまあざつ  
 とこんなものです。

そこでネ、人のためにするということ意味を間違まちがえてはい  
 けませんよ。人を教育するとか導くとか精神的にまた道  
 義的に働きかけてその人のためになるということだと解  
 釈されるとちよつと困るのです。人のためにというものは、  
 人のいうがままにとか、欲するがままにといういわゆる  
 卑俗の意味で、もつと手短かに述べれば人の御機嫌を取  
 ればというくらいのことにはすぎんのです。人にお世辞せじを取

使えばといい変えても差さしつかえ支ないくらいのものです。だから御覧なさい。世の中には徳義的に観察するとずいぶん怪けしからぬと思うような職業がありました。しかもその怪しからぬと思うような職業を渡世にしている奴やつは我々よりはよっぽどえらい生活をしているのがあります。しかし一面からいえば怪しからぬにせよ、道德問題として見れば不埒ふらちにもせよ、事実のうえからいえば最も人のためになることをしているから、それがまた最も己のためになって、最も贅沢きわを極めているといわなければならぬのです。道德問題じゃない、事実問題である。現

に芸妓げいしやというようなものは、私はあまり関係しないから  
 して精くわしいことは知らんけれどもとにかく一流の芸妓と  
 かなんとかなるとちよつと指環ゆびわをかうのでも千円とか五  
 百円という高価なものの中から撰取よりどりをして余裕があるよ  
 うにみえる。私は今ここにニツケルの時計しか持つてお  
 らぬ。高尚こうしょうな意味でいったら芸妓よりも私のほうが人  
 のためにすることが多くはないだろうかという疑うたがひもあ  
 るが、どうも芸妓ほど人の氣に入らないこともまた慥たしか  
 らしい。つまり芸妓は有徳うとくな人だからああいう贅沢がで  
 きる、いくら学問があつても徳のない人間、人に好かれ

ない人間というものは、ニツケルの時計ぐらい持つて我慢がまんしているよりほか仕方しかたがないという結論に落ちてくる。だから私のいう人のためにするという意味は、一般の人の弱点嗜好しこうに投ずるといふ大きな意味で、小さい道徳——道徳は小さくありませぬが、まず事実の一部分にすぎないのだから小さいといつても差支ないでしょう。そういう高尚ではあるが偏狭な意味で人のためにするといふのではなく、天然の事実そのものを引きくるめてなんでもかでも人に歓迎されるといふ意味の「ためにする」仕事を指さしたのであります。



そこで職業上における己のため人のためということ以上のように御記憶を願っておいて、話がまた後戻りあともとどをする恐れがあるかもしれないが、前申ぜんしたとおり人文発達の順序として職業がたいへん割れて細かくなると妙な結果を我々に与えるものだからその結果を一口お話をして、そうして先へ進みたいと思います。私の見るところによると職業の分化錯綜さくそうから我々の受ける影響は種々ありましようが、そのうちに見逃みのがすことのできない一種妙なものがあります。というのはほかでもないが開化の潮流が進めば進むほど、また職業の性質が分れば分れる

ほど、我々は片輪かたわな人間になつてしまふという妙な現象  
が起るのであります。いい換えると自分の商売がしだい  
に専門的に傾いてくるうえに、生存競争のために、人一  
倍の仕事で済んだものが二倍三倍ないし四倍とだんだん  
速力を早めて逐付おいつかなければならないから、そのほうだ  
けに時間と根気を費しがちであると同時に、お隣りのこ  
とや一軒置いたお隣りのことが皆目分かいもくらなくなつてしま  
うのであります。こういうように人間が千筋も万筋もあ  
る職業線の上のただ一線しか往来しないで済むようにな  
り、また他の線へ移る余裕がなくなるのはつまり吾人ごじんの

社会的知識が狭く細く切り詰められるので、あたかも自ら好んで不具になると同じ結果だから、大きくいえば現代の文明は完全な人間を日に日に片輪者に打崩しうちくずつつ進むのだと評しても差支ないのであります。ごくの野蠻時代で人のお世話にはまったくならず、自分で身に纏まとうものを搜し出し、自分で井戸を掘って水を飲み、また自分で木の実かなにかを拾って食って、不自由なく、不足なく、不足があるにしても苦しい顔もせずがまんに我慢をしていれば、それこそ万事人に待つところなき点において、また生活上の知識をいっさい自分に備えたる点において完

全な人間といわなければなりません。ところが今の社会では人のお世話にならないで、一人前に暮らしているものはどこをどう尋ねたって一人もない。この意味からして皆不完全なものばかりである。のみならず自分の専門は、日に月に、年にはむろんのこと、ただ狭く細くなつてゆきさえすればそれで済むのである。ちようど針で掘ほりぬき抜井戸を作るとでも形容してしかるべき有ありさま様になつてゆくばかりです。何商売を例に取つても説明はできますが、この状態を最もよく証明しているものは専門学者などだろうと思います。昔の学者はすべての知識を自分一

人で背負<sup>しよ</sup>って立ったように見えますが、今の学者は自分  
 の研究以外には何も知らない私が前<sup>ぜん</sup>申した意味の不具が  
 揃<sup>そろ</sup>っているのがあります。私のようなものでも世間では  
 たまに学者扱<sup>がくしゃあつかい</sup>にしてくれますが、そうするとやっぱり  
 不具の一人であります。なるほど私などは不具に違<sup>ちが</sup>いな  
 い、どうもちつとも普通のことを知らない。区役所へ出  
 す転居届の書き方も分らなければ、地面を売るにはどん  
 な手続をしていいかさえ分らない。綿は綿の木のどん<sup>たまご</sup>な  
 所をどうして拵<sup>こしら</sup>えるかも解し得ない。玉子豆腐<sup>たまごどうふ</sup>はどう  
 してできるかこれまた不明である。食うことは知ってい

るが拵えることはまったく知らない。その他味淋みりんにしろ、  
醤油しょうゆにしろ、なんにしろかにしろすべて知らないことだ  
らけである。知識のうえにおいて非常な不具といわなけ  
ればなりますまい。けれどもすべてを知らない代りに一  
カ所か二カ所人より知っていることがある。そうして生  
活の時間をただその方面にばかり使ったものだから、完  
全な人間をますます遠ざかって、実に突飛とっぴなものになり  
おおせてしまいました。私ばかりではない、かの博士と  
かなんとかいうものも同様であります。あなたがたは博  
士という諸事万端人間いっさい天地宇宙のことを皆知

っているように思うかもしれないがまったくその反対で、実は不具の不具の最も不具な発達を遂げたものが博士になるのです。それだから私は博士を断りました。しかしあなたがたは——手を叩いたって駄目です。現に博士という名に誤魔化ごまかかされているのだから駄目です。たとえば明石なら明石に医学博士が開業する、片方に医学士があるとする。そうすると医学博士のほうへ行くでしょう。いくら手を叩いたって仕方がない、誤魔化されるのです。内情をお話すれば博士の研究の多くは針の先きで井戸を掘るような仕事をするので、深いことは深い。

掘抜きだから深いことは深いが、いかんせん面積が非常に狭い。それを世間ではすべての方面に深い研究を積んだもの、全体の知識が万遍まんべんなく行き渡っていると誤解して信用を置きすぎるのです。現に博士論文というのを見ると存外細かな題目を捕えて、自分以外には興味もなければ知識もないような事項を穿鑿せんさくしているのがだいぶあるらしく思われます。ところが世間に向つてはただ医学博士・文学博士・法学博士として通っているからあたかもすべての知識を有もっているかのように解釈される。あれは文部省が悪いのかもしれない。虎列刺コレラ病博士とか



ちようチフスはかせ

腸窒扶斯博士とか赤痢博士とかもつと判然と領分を明らかにしたほうが善くはないかと思う。肺病患者が赤痢の論文を出して博士になった医者のところへ行つたつて差支はないが、その人に博士たる名誉を与えたのは肺病とは没交渉の赤痢であつて見れば、単に博士の名で肺病を担ぎ込んで<sup>かつ</sup>は勘違<sup>かんちがい</sup>になるかもしれない。博士のことはそのくらいにしてただ以上をかい撮<sup>つま</sup>んでいうと、吾人は開化の潮流に押し流されて日に日に不具になりつつあるということだけは確かでしょう。それをほかの言葉<sup>ことば</sup>でいうと自分一人ではとても生きていられない人間になり

つつあるのである。自分の専門にしていることにかけては、不具的に非常に深いかもしれぬが、その代り一般的の事物については、たいへんに知識が欠乏した妙な変人ばかりできつつあるという意味です。

私は職業上己のためとか人のためとかいう言葉から出立してその先へ進むはずのところをツイわき道へそれて職業上の片輪ということをお話ししもうしあだしたから、ついでにその片輪の所置について一言申上げて、また己のため人のための本論に立ち帰りたい。順序の乱れるのは口にか駆られる講演の常としてお許しを願います。

そこで世の中では——ことに昔の道德観や昔堅氣むかしかたぎの親の意見やまたは一般世間の信用などからいいますと、あの人は家業に精を出す、感心だといって賞ほめそやします。いわゆる家業に精を出す感心な人というのはとりも直さず真黒まっくろになって働いている一般的の知識の欠乏した人間にすぎないのだから面白い。露骨にいえばみずから進んで不具になるような人間を世の中では賞ほめているのです。それはとにかくとして現今のように各自の職業が細く深くなつて知識や興味の面積が日に日に狭せばめられてゆくならば、吾人は表面上社会的共同生活を営んでいると

は申しながら、その実銘々孤立して山の中に立て籠こもっている。いと一般で、隣となり合あせに居ぼくを卜ぼくしていなから心は天涯てんがいに懸かけ離はなれて暮くしていても評するよりほかに仕方がない有様に陥おちってきます。これでは相互を了解する知識も同情も起りようがなく、せつかくかたまたって生きていても内部の生活はむしろバラバラでなんの連鎖れんさもない。ちようど乾涸ひからびた糲ほしいのようなもので一粒ひとつぶ一粒ひとつぶに孤立ひとつぶひとつぶしているのだから根ねツから面白くないでしょう。人間の職業が専門的になってまたおのおの自分の専門に頭つこを突つ込んで少しでも外面を見渡す余裕がなくなると当面のこと

以外はなにも分らなくなる。また分らせようという興味も出てきにくい。それで差支ないといえればそれまでであるが、現に家業にはいくら精通してもまたいくら勉強してもそればかりじゃどこか不足な うったえ 訴 あじわ が内部から萌 きざ してきてなんとなく十分に人間的な心持が味 あじわ ええないのだから已をえない。したがってこの孤立支離の弊をなんとかして矯 た めなければならなくなる。それを矯める方法をお話しするためにはわざわざこの壇上に現われたのではないから詳しいことは述べませんが、また述べるにしたところでだいたいはすでに諸君も御承知のことであるが、ま

あ物のついでだから一言それに触れておきましょう。すでに個々介立の弊が相互の知識の欠乏と同情の希薄から起つたとすれば、我々は自分の家業商売に逐われて日もまた足らぬ時間しか有<sup>も</sup>たない身分であるにもかかわらず、その乏しい余裕を割<sup>さ</sup>いて一般の人間を広く了解しましたこれに同情し得<sup>う</sup>る程度に互の温<sup>あたたかみ</sup>味を醸<sup>かも</sup>す法を講じなければならぬ。それにはこういう公会堂のようなものを作つて時々講演者などを聘<sup>へい</sup>して知識上の啓発をはかるのも便法でありますし、またそう知的の方面ばかりでは窮屈すぎるから、いわゆる社交機関を利用して、互の歡

情を罄つくすのも良法でありましょう。時としては方便の道具として酒や女を用いても好いくらいのものでしよう。実業家などがむずかしい相談をするのにかえって見当けんとう違ちがいの待合まちあなどで落合おちあって要領ようりようを得ているのも、まったく酒色という人間の窮屈きうくつを融とかし合う機械そなわの具そなわった場所かどで、その影響の下に、角かどの取れた同情のある人間らしい心持で相互に所置まじまができるからだろうと思います。現に事が纏まとまるといふ実用上の言葉が人間として彼我打ち解けた非実用の快感状態から出立しなければならぬのでも分りました。こういふと私が酒や女をむやみに推

薦するようでちよつと可笑<sup>おか</sup>しいが、私の申上げる主意はたとい弊害の多い酒や女や待合などが交際の機関として上流の人に用いられるのでも、人間は個々別々に孤立して互の融和同情を眼中に置かず、ただ自家専門の職業にのみ腐心してはいられないものだという例にお話したくらしいのものであります。本来をいうと私はそういう社交機関よりも、諸君が本業に費やす時間以外の余裕を挙げ<sup>あ</sup>て文学書をお読みにならんことを希望するのであります。これはわが田へ水を引くような議論にもみえますが、元来文学上の書物は専門的の述作ではない、多く一般の



人間に共通な点について批評なり叙述なり試みたものであるから、職業のいかんにかかわらず、階級のいかんにかかわらず赤裸々の人間を赤裸々に結び付けて、そうしてすべての他の<sup>しょうへき</sup>墻壁を打破するものでありますから、吾人が人間として相互に結び付くためには最も<sup>りっぱ</sup>立派でまた最も弊の少ない機関だと思われのです。少くとも<sup>すくな</sup>芸妓<sup>げいしや</sup>を上げて酒を飲んだと同等以上の効果がありそうに思われるのであります。あなたがたもこういう公会堂へわざわざこの暑いのに集まって、私のような者の言うことを黙って聴くような勇氣があるのだから、そういう楽

な時間を利用して少しお読みになつたらいかかだろうと申したいのです。職業が細かくなりまた忙がしくなる結果我々が不具になるが、それはどうして矯正きょうせいするかという問題はまずこのくらいにして、この講演の冒頭に述べた己のためとか人のためとかいう議論に立ち帰つてその約つづまりをつけてこの講演を結びたいと思います。

それで前申した己のためにするとか人のためにするとかいう見地からして職業を観察すると、職業というものは要するに人のためにするものだということに、どうしても根本義を置かなければなりません。人のためにする

結果が己のためになるのだから、元はもとどうしても他人本位である。すでに他人本位であるからには種類の選択分量の多少すべて他を目安めやすにして働かなければならない。要するに取捨興廢の権威ともに自己の手中にはないことになる。したがって自分が最上と思う製作を世間に勧めて世間はいつこう顧みなかったり自分は心持が好くないので休みたくても世間は平日のごとく要求をほしいまま恣恣にしたりすべて己を曲げて人に従わなくては商売にはならない。この自己を曲げるといふことは成功にはたいせつであるが心理的にははなはだ厭いやなものである。なかんずく

最も厭なものはいかな<sup>すき</sup>好な道でもある程度以上に強<sup>し</sup>いられてその性質がしだいに嫌<sup>けんお</sup>悪に変化する時にある。ところが職業とか専門とかいうものは前申すとおり自分の需用以上その方面に働いてそうしてその自分に不要な部分を挙げて他の使用に供するのが目的であるから、自己を本位にしていえば当初から不必要でもあり、厭でもあることをしいて遣るという意味である。よく人が商売となるとなんでも厭になるものだと言いますがその厭になる理由はまったくこれがためなのです。いやしくも道楽であるあいだは自分に勝手な仕事を自分の適宜な分量でや

るのだから面白いに違ちがないが、その道楽が職業と変化  
 する刹那せつなに今まで自己にあつた權威が突然他人の手に移  
 るから快樂がたちまち苦痛になるのは已むを得ない。打  
 ち明けたお話が己のためにすればこそ好なので人のため  
 にしなければならぬ義務を括り付けられればどうした  
 って面白くはゆかないに極つています。元來己を捨てる  
 ということは、道德からいえば已むを得ず不徳も犯そう  
 し、知識からいえば己の程度を下げても無知なこともいお  
 うし、人情からいえば己の義理を低くして阿漕あこぎな仕打しうちも  
 しようし、趣味からいえば己の芸術眼を下げても下劣な

好尚こうしように投じようし、十中八九の場合悪いほうに傾き易やすいから困るのである。たとえば新聞を拵えてみても、あまり下品なことは書かないほうが宣いと思いつながら、すでに商売であれば販売の形勢から考え営業の成立するくらいには俗衆の御機嫌ごきげんを取らなければ立ち行かない。要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会が本尊になって自分はこの本尊の鼻息を伺って生活するのが自然の理である。

ただここにどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科学者哲学者もしくは芸術家のような

もので、これ等らはまあ特別の一階級とでも見み做なすよりほかに仕方がないので。哲学者とか科学者というものは直接世間の実生活に関係の遠い方面をのみ研究しているのだから、世の中に気に入ろうとしたって気いらに入れるわけでもなし、世の中でもこれ等の人の態度いかんでその研究を買ったり買わなかったりすることもきわめて少ないには違はいないけれども、ああいう種類の人が物好きに実験室へ入はいって朝から晩まで仕事をしたり、または書齋に閉じ籠こもって深い考かんがえに沈しずんだりして万事を等閑に付している有様を見ると、世の中にあれほど己のためにしてい

るものはないだろうと思わずにはいられないくらいです。それから芸術家もそうです。こうもしたらもっと評判が好くなるだろう、ああもしたらまだ活計向くらしむきの助けになるだろうと傍はたの者から見ればいろいろ忠告のしたいところもあるが、本人は決してそんな作略はない、ただ自分の好きな時に好きなものを描いたり作ったりするだけである。もっとも当人がすでに人間であつて相応に物質的嗜好しよくのあるのはむろんだから多少世間と折合おりあつて歩調を改めることがないでもないが、まあだいたいからいうと自我中心で、ごく卑近の意味の道德からいえばこれほど



我儘わがままのものはない、これほど道楽なものはないくらいです。すでにお話をしたとおりおよそ職業として成立するためにはなにか人のためにする、すなわち世の嗜好に投ずると一般の御機嫌を取るところがなければならぬのだが、本来からいうと道楽本位の科学者とか哲学者とかまた芸術家とかいうものはその立場からしてすでに職業の性質を失っているといわなければならぬ。実際今の世で彼等は名前なまえには職業として存在するが実質のうえでほとんど職業として認められないほど割に合わない報酬を受けているのでこの辺の消息はよく分るでしょう。

現に科学者哲学者などは直接世間と取引しては食ってゆ  
 けないからたいていは政府の保護の下に大学教授とかな  
 んとかいう役になってやつと露命をつないでいる。芸術  
 家でも時に容れられず世から顧みられないで自然本位を  
 押し通す人はずいぶん惨澹たる境遇に沈淪しているもの  
 が多いのです。御承知の大雅堂でも今でこそたいした画  
 工であるがその当時毫も世間向の画をかかなかつたため  
 に生涯真葛が原の陋居に潜んでまるで乞食と同じ一生  
 を送りました。フランスのミレーも生きているあいだは  
 常に物質的の窮乏に苦しめられていました。またこれは

個人の例ではないが日本の昔に盛んであつた禅僧の修行  
 などというものも極端な自然本位の道楽生活でありま  
 す。彼等は見性けんしょうのため究真のためすべてを抛なげうつて坐禅  
 の工夫をします。默然と坐していることがなんで人のた  
 めになりました。善い意味にも悪い意味にも世間とは  
 没交渉である点から見て彼等禅僧は立派りっぱな道楽ものであ  
 ります。したがって彼等はその苦行難行に対して世間か  
 らなんらの物質的報酬を得ていません。麻の法衣ほうえを着て  
 麦の飯を食つてあくまで道を求めていました。要するに  
 原理は簡単で、物質的に人のためにする分量が多ければ

多いほど物質的に己のためになり、精神的に己のためによければするほど物質的には己の不為になるのであります。

以上申し上げた科学者哲学者もしくは芸術家の類が職業として優に存在し得る<sup>う</sup>かは疑問として、これは自己本位でなければとうてい成功しないことだけは明かなようであります。なぜなればこれ等が人のためにすると己と  
いうものはなくなってしまうからであります。ことに芸術家で己の無い芸術家は蟬<sup>せみ</sup>の脱殻<sup>ぬけがら</sup>同然で、ほとんど役に立たない。自分に気の乗った作ができなくてただ人に迎

えられたい一心でやる仕事には自己という精神が籠るはずがない。すべてが借り物になって魂の宿る余地がなくなるばかりです。私は芸術家というほどのものでもないが、まあ文学上の述作をやっているから、やはりこの種類に属する人間と行って差支ないでしょう。しかもなか書いて生活費を取って食っているのです。手短かにいえば文学を職業としているのです。けれども私が文学を職業とするのは、人のためにするすなわち己を捨てて世間の御機嫌を取り得た結果として職業としていると見るよりは、己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心

術の発現の結果が偶然人のためになって、人の氣に入っただけの報酬が物質的に自分に反響してきたのだと見るのがほんとうだろうと思います。もしこれが天から人のためばかりの職業であって、根本的に己を枉まげてはじめて存在し得る場合には、私は断然文学を止めやなければならぬ。さいわいにして私自身を本位にした趣味なり批判なりが、偶然にも諸君の氣に合つて、その氣に合つた人だけに読まれ、氣に合つた人だけから少なくてとも物質的の報酬、（あるいは感謝でも宜よろしい）を得つつ今日まで押してきたのである。いくら考えても偶然

の結果である。この偶然が壊れた日にはどっち本位にするかというと、私は私を本位にしなければ作物が自分から見てものにならない。私ばかりじゃない誰しも芸術家である以上はそう考えるでしょう。したがってこういう場合には、世間が芸術家を自分に引付けるよりも自分が芸術家に食付いてゆくよりほかにしようがないのであります。食付いてゆかなければそれまでという話である。芸術家とか学者とかいうものは、この点において我儘のものであるが、その我儘なために彼等の道において成功する。他の言葉でいうと、彼等にとっては道楽すなわち

本職なのである。彼等は自分の好きな時、自分の好きなものでなければ、書きもしなければ拵えもしない。いたつて横着おうちやくな道楽者であるがすでに性質上道楽本位の職業をしているのだから已むを得ないので。そういう人をして己を捨てなければ立ち行かぬように強しいたりまたは否応いやおうなしに天然を枉げさせたりするのは、まずその人を殺すと同じ結果に陥るのです。私は新聞に關係がありますが、さすが、さいわいにして社主からしてモツと売れ口の宣よいような小説を書けとか、あるいはモツとたくさん書かなくちや不可いかんとか、そういう外圧的の注意を受けたこ



とは今日までとんとありません。社のほうでは私に私本位の下に述作することをだいたいのうえで許してくれつつある。その代り月給も昇<sup>あ</sup>げてくれないが、いくら月給を昇げてくれてもこういう取<sup>とりあつかい</sup>扱を変じて万事営業本位だけで作物の性質や分量を指定されてはそれこそ大いに困るのであります。私ばかりではないすべての芸術家科学者哲学者はみなそうだろうと思う。彼等は一も二もなく道楽本位に生活する人間だからである。たいへん我儘のようであるけれども、事実そうなのである。したがって恒産<sup>こうさん</sup>のない以上科学者でも哲学者でも政府の保護か個

人の保護がなければまあ昔の禅僧ぐらいの生活を標準として暮さなければならぬはずである。直接世間を相手にする芸術家に至ってはもしその述作なり製作がどこか社会の一部に反響を起して、その反響が物質的報酬となつて現われてこない以上は餓死するよりほかに仕方がない。己を枉げるといふことと彼等の仕事とは全然妥協を許さない性質のものだからである。

私は職業の性質やら特色についてはじめに一言を費やし、開化の趨勢すうせいじょう上その社会に及ぼす影響を述べ、最後に職業と道楽の関係を説き、その末段に道楽的職業とい

うような一種の変体のあることを御吹聴に及んで私などの職業がどの点まで職業でどの点までが道楽であるかを諸君にだいたい理會せしめたつもりであります。これでこの講演を終わります。(明治四十四年八月明石において述)

(明治四四・一一・一〇『朝日講演集』)



日本文学電子図書館

---

道楽と職業

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 9 卷」角川書店  
昭和42年10月10日 6版発行

---

日本文学電子図書館